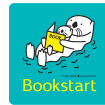


Bookstart Newsletter



ブックスタート・ニュースレター

2025
秋冬
No.87



栃木県野木町

連載特集「ブックスタートとウェルビーイング」②

ブックスタートが「地域」にもたらす ウェルビーイングを考える

赤ちゃんを抱っこしながら笑顔を見せるお母さん。隣に座るお父さんも楽しそうです。その様子を見守るボランティアにも笑みがこぼれます。上の写真は、栃木県野木町のブックスタートのひとコマです。ブックスタートではこんな風に、その場にいる人同士が幸せを分かち合うような場面が自然とつくられます。

前号では、親と子の「ウェルビーイング」に焦点をあてました。ウェルビーイングとは、心身ともに、そして社会的にも満たされた「よい状態」が安定的に持続していることを指します。栃木県野木町の写真にも、親と子、そして関わる人のウェルビーイングが映し出されているように感じられます。

では、ブックスタートを通じて、親と子、関わる人のウェルビーイングが育まれているとき、「地域」にはどのような変化がおき、何がもたらされているのでしょうか。

栃木県野木町の事例、こども家庭庁「こども家庭審議会」会長を務める学習院大学文学部教授の秋田喜代美さんのインタビュー、これまでにブックスタートが実現してきたことを通して考えます。

第2特集 (P6)

海外カンファレンス参加報告
『世界とつながるブックスタート』



野木町のボランティアの皆さん。
集まったメッセージの前で



記入用紙（左）とメッセージブック（右）

2024年度にブックスタート事業が20周年を迎えた栃木県野木町。記念事業として、町の子どもたちや保護者に、事業へのメッセージを募りました。記入用紙を町内すべての幼稚園・保育園・小中学校に配布し、図書館に持参してもらったところ、「うれしい。ほんがだいすき。だからありがとう」と、用紙いっぱいの子どもの字で書かれたメッセージや、「長女が今年20歳になります。ブックスタートでもらった絵本は、私と娘の思い出の本です」といった保護者からの言葉など、様々な世代の声が集まりました。それらは

メッセージブックとしてファイルにまとめられ、事務局の図書館から、ボランティア一人ひとりに、感謝を込めて手渡されました。

20年以上活動に携わるボランティアの西巻ちず子さんは次のように話しました。「野木町に暮らす子どもたちのほとんどが、ブックスタートで絵本を手渡した『あの日の赤ちゃん』なんです。親子で絵本を楽しみながら成長してきてくれたことが実感でき、胸がいっぱいになりました。一つひとつのメッセージが私の宝物です」

集まった親子の声は、野木町のブックスタートが届けてきた「絵本で心を通わせ合うひととき」のきっかけが、それぞれの家庭に確かに根付いていることを関わる人に伝えています。

栃木県野木町
『あの日の赤ちゃん』から
届いたメッセージ

VOICE

読みきかせの文化が DNA のように息づく

教育長 永井 啓之 さん

中学校長時代に同行した保育体験で、普段は口数が少ない生徒が、園児にいい笑顔で絵本を読んでいた。それは、ブックスタートから始まり、家庭、地域、学校で育まれた読みきかせの文化が、子どもたちの中に DNA のように息づいているからかもしれません。ブックスタートのような事業は成果を数字で示しにくいものです。だからこそ、「いいことはいい」と信じ、市民と行政が同じ思いで事業を実施していくことが大切だと考えています。



永井さん 西巻さん 渡邊さん 黒川さん

親子の思い出づくりのお手伝いを

図書館 渡邊 萌々花 さん

私は昨年度入庁し、事業の担当となりました。野木町では、自分が生まれる前からこの事業が始まっていたと知り、とても驚きました。20 周年記念事業で届いたメッセージを読み、親子の思い出作りを支える取り組みに携われていることを再確認でき、嬉しく思いました。

地域全体で赤ちゃんの育ちを支える

図書館 黒川 悦子 さん

年に一度、副町長、教育長、関係機関、ボランティアが集まり、運営会議を行なっています。異なる立場の人たちが顔を合わせることで、事業を安定的に運営できるだけでなく、「地域みんなで赤ちゃんを育てていこう」という思いが自然に広がっているのを感じます。

一冊の絵本が

「地域のウェルビーイング」の出発点になる

学習院大学文学部教授／東京大学名誉教授
NPOブックスタート理事

秋田喜代美さん



●発達心理学、教育心理学が専門で、こども家庭庁「こども家庭審議会」会長などを務める秋田喜代美さんに、ウェルビーイングの視点からブックスタートについてお話を伺いました。

「お幸せにー」の思いからはじまる支え合いの文化

私が初めてブックスタートを視察したときのこと——ボランティアが絵本を読むと赤ちゃんが目を輝かせて絵本をみつめ、その様子を見た保護者が喜んで、会場がぱっと明るい空気に包まれました。

ブックスタートでは「お幸せにー」という思いを込めて絵本を手渡しします。すると、受け取った親子の笑顔が、自然と手渡す人の喜びや励みとなって返ってきます。こうした「互恵的」な関係性は、人と人が互いを認め合い、支え合っていくことの根幹となる、とても価値のあるものです。

「地域の厚み」をつくる

こども家庭庁が掲げる「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」(※)には、「保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をす

る」ことの重要性和、「こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」ことの必要性が示されています。

保護者・養育者を支えることは、子どものウェルビーイングを高める上で欠かせません。また、子どもは、様々な場所で日々を過ごし、色々な人との関わりの中で育ちます。子どもと接する人、子どもが過ごす空間で子どもを見守る人、地域社会を構成する人、社会全体の環境をつくる人が、多層的に、網羅的に、子どものウェルビーイングを支える構造をつくるのが大切

です。ブックスタートには、図書館職員、保健師、子育て支援課職員、市民ボランティア、ときには大学生など、多様な立場の人が関わり、ネットワークを築き、赤ちゃんの育ちを支える環境を形づくっています。家庭だけに子育ての責任を委ねるのではなく、地域社会で親子を迎え、成長を見守る——ブックスタートによってつくられている

のは、まさしく、子どものウェルビーイングを支える「地域の厚み」なのではないでしょうか。

世代や多様性を超えてつながる

ブックスタートは、世代を超えた人のつながりも生み出します。活動に携わる高齢のボランティアは、会場にやってくる若い世代と関わることで、「この地域には未来がある」と希望を感じることでしょう。受け取った絵本は、祖父母が孫に絵本を読みかせるきっかけにもなるかもしれません。ブックスタートで図書館の読みかかせ会を知り、参加した親子は、様々な世代の住民と交流します。絵本を間に、生の声で気持ちを交わすことで、人々がつながるのです。

そしてブックスタートは、「すべての赤ちゃんに」という理念のもと、外国にルーツのある赤ちゃんや障害のある赤ちゃん、健診に来られない家庭にも、絵本を通じたあたたかなひとときを届けることを大切にしています。

こうした多様な営みの一つひとつが、「地域のウェルビーイング」の大切な基

盤になっているのではないかと感じます。

20年先の「ウェルビーイング」を見つめて

私が、こども家庭庁の政策を検討する際にお話ししたのは、「こどもまんなか社会」で育った子どもたちは、次にもこどもまんなか社会をつくる大人になっていく、ということです。

実はこの原点となっているのは、日本でブックスタートが始まる前、NPOブックスタートの初代理事長松居直さんから伺った、「この活動の本当の成果は、絵本を受け取った子どもが、20年後に大人になったとき、今度は自分が『子どもに絵本を読んでもらいたい』と考えること」という言葉です。

ブックスタートは、親から子へ、そして様々な世代との関わりを通して、次の世代へと文化や関係性が受け継がれていく営みです。その世代を超えた営みは、地域全体に共通する文化や価値観を育み、「地域のウェルビーイング」を持続的に支えます。いまその価値を改めて捉えなおすことは、未来のまちの姿を描く上で、大きな意味を持つでしょう。

※はじめの100か月の育ちビジョン。妊娠期から小学校1年生までの100か月において、こども一人ひとりの健やかな育ちのために社会全体で大切にしたい考え方をまとめたもの

地域のウェルビーイング ～各地の事例から～

秋田喜代美さんの言葉にある「互恵的な関係性により、ブックスタートを行う地域では支え合いの文化が根つき、様々なウェルビーイングがもたらされてきました。

例えば、親子と地域の人との出会いは、親子に目を向ける人、孤立しがちな家庭を見守る人を増やし、地域に安心感とあたたかさを広げました（事例1、事例2）。事業を通じた行政の部局横断的な連携は、別の事業での連携へと発展しました（事例3）。外国人や障害のある方も事業の対象であることは、すべての人にとって暮らしやすいまちづくりに目を向けるきっかけとなりました（事例4）。こうした充実した取り組みは、住民が地域への誇りや愛着を感じることもつながりました（事例5）。

もちろん、ブックスタートだけでなく、すべての地域課題を解決することはできません。しかし、活動を通して築かれるつながりは、多様な人々が知見や経験を持ち寄り、より包括的に地域課題に向き合うための土台となり得るのではないだろうか。

事例 1

これまでは図書館に赤ちゃんが来ても、『赤ちゃんが来たな』としか思わなかったのですが、事業に関わるようになってからは、『ブックスタートはもう受けたかな?』と気になって、カウンターから出ていって話しかけてしまうんです。

（図書館 東京都杉並区）



事例 4

事業開始当初、ブックスタートを受けた中国人のお子さんが、おじいちゃんと一緒によく図書館に来ていました。おじいちゃんは日本語を話せませんでしたが、図書館が家族の行き場の一つになっていると感じました。

（図書館 愛媛県四国中央市）



事例 2

ブックスタートで気になる親子がいれば、主任児童委員さんが行政につなぎ、ご自身が持つネットワークを使って手を差し伸べてくれます。

（子育て支援センター 広島県府中市）

事例 3

保健師が〈子ども読書活動推進計画〉の策定委員に加わったり、図書館が保健センターに置く絵本の選書に協力をしたりと、協力し合う機会が増えました。そこから子どもやお年寄りを対象とした事業でも連携を深めていくようになりました。

（図書館 滋賀県長浜市）



事例 5

10 年前にブックスタートを受けた時の印象が残っていて、今度は手渡す立場から協力したいというお母さんがボランティアに加わりました。

（図書館 愛知県西尾市）

※事例は当 NPO の刊行物から改めて掲載

ブックスタートと ウェルビーイング

前号と今号で考えてきたことを手がかりに、ブックスタートがもたらすウェルビーイングを、「親と子」「関わる人」「地域」の3つの層に整理しました（図1）。

ブックスタートは、赤ちゃんと保護者が絵本を介してふれあうきっかけを届け、親子の愛着や信頼を育むことで、「親と子」のウェルビーイングを支えます。行政職員やボランティアが事業に携わる中で感じる喜びややりがい、活動を通じて育まれるつながりは、「関わる人」にもウェルビーイングをもたらします。ブックスタートをきっかけに地域の中に芽生えた信頼と安心の関係性は、「地域」のウェルビーイングへとつながります。

この三つの視点から活動を見直すと、広がりや深まりに新しい展開が見えてきます。行政の理解や市民からの支持を得る際にも有効な切り口となるでしょう。

当NPOでは、今後も各地の実践とともに歩みを進め、活動の新たな可能性を探っていきます。

図1 ブックスタートがもたらすウェルビーイング



開催報告

ブックスタート全国研修会 2025 in 宮城

2025年9月9日、宮城県仙台市で全国研修会を開催しました。今回のテーマは「赤ちゃんの笑顔のために私たちができること～みんなで育む地域のウェルビーイング～」。自治体による事例報告では、実施方法や運営体制、今後の課題などが紹介されました。仲間との交流や手渡し絵本の選定に関わる楽しさがボランティア継続の力になっているという話や、核家族化が進む中、ブックスタートが世代間交流の場になっている話に共感する参加者の姿が見られました。



● プログラム ●

1. ブックスタートの「今」と「これから」
NPO ブックスタート
2. 事例報告
宮城県石巻市 生涯学習課
福島県二本松市 子育て支援課
3. グループトーク



乳児院入所者や外国人への対応、フォローアップ、予算について質問がありました。



11グループに分かれて意見交換をしました。

詳しくは当NPO
ウェブサイトをご覧ください▼



海外カンファレンス参加報告

世界とつながるブックスタート

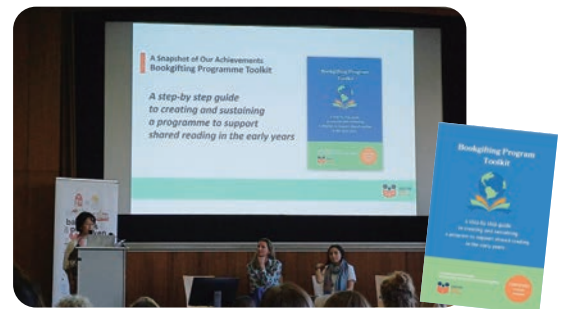
2025年6月、ベルギー・ブリュッセルで「赤ちゃんに絵本を贈る活動の世界ネットワーク (Global Network for Early Years Bookgifting、以下 GNEYB)」の初の対面カンファレンスが開かれました。GNEYB は世界に広がる活動同士の情報交換や、これから立ち上げようとする活動への支援を目的として2018年に発足し、現在33の国と地域が参加しています。これまでオンラインでしかつながることができなかったメンバーが、コロナ禍を経てようやく一堂に会す機会となりました。初めて会ったとは思えないような和やかな雰囲気の中、活動の情報交換と、ネットワークのこれからについて活発な話し合いがなされました。

各活動の経験をまとめた実践ガイドブック

会議の冒頭で報告されたのは『Bookgifting Program Toolkit (ブックギフティング・プログラム・ツールキット)』の完成です。

これはオンライン会議を重ねる中で共有された各活動の経験をもとに、充実した取り組みに役立つヒントや情報をまとめた実践ガイドブック。

日本の活動もこれまでさまざまな切り口で紹介してきましたが、関係機関との連携や、絵本を手渡す人への研修プログラムなど、多くの部分に日本の経験が活かされています。



ツールキットは、「立ち上げ」「実施」「継続」と活動の段階ごとに3章で構成。今後はウェブサイトでの公開や、グローバルサウスの NGO と協働し活用する提案も。

共通する課題と経験の共有

各地の活動内容を共有するセッションでは、「連携」「研修」「多言語対応」「絵本選考と本の手配」「キャンペーン / 社会への働きかけ」といったテーマごとに、プレゼンテーションやパネルディスカッションが行われました。

日本からは「いっしょにえほん写真コンテスト」の取り組みについて動画を交えて紹介。ブックスタートの対象親子に留まらず、社会全体に share books (赤ちゃんとかち合う絵本のひととき) のメッセージを広げようとする工夫が関心を引きました。発表後には「来年はぜひ一緒に」と声をかけてくださる方も多く、うれしい反響がありました。

それぞれの国や地域には異なる社会背景があり、出版文化や福祉政策のあり方も多様です。しかし活動を立ち上げ、継続する際に直面する課題には、驚くほど共通する部分がありました。だからこそ互いの経験に耳を傾け、共感し学び合う時間はとても豊かなものとなりました。



会場には絵本パックの展示スペースも。世界各地の赤ちゃん絵本とともに、布製や厚紙製のものなど、色とりどりのパックが。



ブックスタートコリアのアン・チャンスーさん(左)と。2002年来日の際に語った「ブックスタートは社会の母性を育む」という言葉、その活動への思いは今も変わらずあたたかい。



ヨーロッパをはじめ、アジア、アフリカ、北米・南米に広がる 23 の活動から、37 名が参加

赤ちゃんに絵本を贈る活動の世界ネットワーク Global Network for Early Years Bookgifting

ウェブサイトはこちらから▼



share books からつながる思い

カンファレンスの期間中には、GNEYB のメンバーに加え、欧州議会議員や NGO 関係者など、幅広い層に向けて日本の活動を紹介する機会もありました。

日本が教育的効果を直接の目的とせず「絵本を介した気持ちの通い合い」に焦点を当ててきたこと、そして行政機関だけでなく市民ボランティアも含め、多様な立場の人々の共感によって支えられてきたことを伝えました。すると教育機会の公平性や読書推進を目的とする活動が多いヨーロッパにおいて、日本の理念は近年注目を集める「ウェルビーイング」の考え方にも通じるものとして受け止められ、大きな関心を集めることになりました。

* * * * *

日本で大切にしてきたのは、ブックスタートが届ける share books のひとときを、人間の心の奥底にある幸福感につながる体験として捉えること。そして、それが短期的な分かりやすい効果ではなく、赤ちゃんと保護者、地域にまで広がるウェルビーイングをもたらすという視点でした。

今回のカンファレンス参加は、そのことを世界のどこかで赤ちゃんに絵本を手渡す人たちと共有し、新たな広がりを感じさせる機会となりました。

(報告：佐藤いづみ)

子ども・社会を考える

講演会&対談

2026 年 2 月 12 日 (木)

東京にて開催



アレクサンドラ・ストリックさん

イギリスの児童書作家
児童書における多様性とインクルージョンの専門家

● 多様性を描く ―子どもの声でつくる児童書― ●

障害の有無や文化的背景、家庭環境の違いに関わらず、すべての子どもが自然に「自分も本の中にいる」と感じられる本づくりを推進するアレクサンドラ・ストリックさん。多様な背景をもつ子どもたちと本のつくり手をつなぐイギリスの団体「インクルーシブ・マインズ」の共同設立者でもあります。

講演会では、彼女の実践とそこから見える社会の姿を紹介。さらに、美学者で身体論の専門家・伊藤亜紗さん、バリアフリー絵本の研究者・攪上久子さんとの対談も予定しています。

詳細は NPO ブックスタートのウェブサイトでご確認ください。

参加受付は 12 月上旬から。

いっしょにえほん写真コンテスト 2025

受賞作品決定！

誰かといっしょにえほんを開き、楽しいひとときを共有する——。
そんな share books のひとときが、子どもたちのまわりに広がることを願い、
Instagram で開催している写真コンテスト。
応募総数 255 点から、今年度の受賞作品が決定しました！

大賞



つながる声

愛知県
yumi さん

ばあばに抱っこされて、大好きな絵本を読んでもくれたのは、ひいばあば。
かつてはパパも、この声でいろんな絵本を読んでもらっていたそうです。
見つめ合うふたりの姿があたたかくて、家族の時間がゆっくり繋がって
いくのを感じました。

選者（五十音順）

- かさいまり さん
絵本作家
- 金柿 秀幸 さん
絵本ナビ代表
- きなこ さん
フォトグラファー・インスタグラマー
- NPO ブックスタート事務局

大賞 に輝いたのは、
愛知県 yumi さんの作品です。

まっすぐな瞳で、ひいばあばを
見つめる赤ちゃん。過去から受
け継がれる「愛情のボタン」が、
ひいばあばの「声」に乗って、
赤ちゃんに届けられています。

四世代にわたる家族の時間が、
ぎゅっと凝縮された一枚。
撮影されたお母さんに拍手です！

受賞作品 は当 NPO の
ウェブサイト で公開中



選者からのコメントも是非ご覧ください！

＼ たくさんのご応募ありがとうございました！ ／



ことのは NPO ブックスタートのスタッフが出合った言葉

子どもにとって、様々な人と関わる場が作られていくということは、非常に意味があることなのです。

「みんなで子どもを支えていく」

そのこと自体が、子どもに様々な副次的効果をもたらします。

子ども・社会を考えるシリーズ 講演録『赤ちゃん～ゆりかごの中の科学者～』（榎原洋一 著・NPO ブックスタート編）より

この言葉にふれたとき、近所の人々が「おはよう」と声をかけ、子どもの話に笑顔で応えてくれた場面が思い浮かびました。
何気ないやりとりが、子どもに安心感を、そして親の私にもぬくもりを届けてくれる。そんな関わりが、子どもが安心して
育つ支えになるのだと感じました。